中村俊定文庫
文庫 18
302

せい
すなく

延享五

宮内省圖書寮

中村俊定文庫

俊定藏

他治妻はるけ

もろはしよりおを祝すれこそるしさるそゝ乃英比
おゝ仰るのゝなゝしてのゝたゝめるゝまゝれるゝ
ゝゝ狩りまへゝ中乃ゝ比おゝ新年ゝ寿のゝ
祥乃ゝくるゝんをやゝこの八あゝと楚人のゝを驚く
その樋を作りゝ買ふものゝをゝゝ次買ふものゝ
樋を喜んゝて寶ゝとしゝゝ今乃世比滑稽家ゝハ
なゝ伐ゝを社樋をかゝちゝれのゝ樋豈ゝまゝるゝんや

弘化後
李超稿

さて低俗流をきゝかゝこゝ蕉風の名を
售ひて実ハ浩徳乃流をあゝそひ阿弥ハ見ぬ
宴に臨ミあるをもて角々粗豪に倒れてみ情の
薄くいとくゝ心のいと浅く極り少笑ふ事てゝ
彼蕉風を信ずるものハ不易流行と常変ふ
佶屈を悪るゝ者ハ比論屈曲をもゝ見ぬ事を要
とのみて七部八体をもとし其角に依る者ハ
荒唐無味をそゝ〻〻敢を吸して論を先

とすれとも他ハ後乃ふゝおもてうせんゆ還空
老人の偏執なるきハ自化ハ下なりとアきれし
も全言に古聖それ人の力ハのきりるかれて
ハ一代の人物にふゝくそうふきものゝ
彼にくハしきあこと一場の邪変なるゝ中変に
法流のゝ〻〻法みあるゝ一金此矩規をも
且て籬乃教をゝゝをゝハ法ゝすゝ門
人乃者成者ハめゝおゝ世のもの心変よおとさん

とれたるハかなりくハしく記るハ五代教を過てい
糊しるされるゆきき者ハかの流を汲んで
てくいりはるてさ井それ樋を水てむるもと
めるゆへなれるうきとしその玉をはるうと
おのふと元ケてハ家乃あきはてよかてんり
アるに俗祖盤侯祿明京著の作て草よ
木よ爾るしめれ市さの家て流めもれ
一金をすれるの〳〵きをめてしおるるれて

きふとりれも風雅を自性なりと思き人も
志れきれるり情の邪ハ俗人のおと家乃意す
むなしく藻てうつも彩うるハなる弘前山乃
璞るあるこのるう〳〵きれうち破をふしみ
かむ吾源紫陽河賀茂尾張乃男て稚性
して風雅をもて恥きて握中れ明月人を
ゆるり志むるれしなうはその餘えをのれみ
其温柔る帰するものすくふるは去年丁卯

の秋月見るにたむけ　哭て杖を引て宮戸川
乃あくるかちうしかりて茅蜩を志めるかりて
その門に聚るものもいつれとして玉振なるき
ハなしされはこそ横笛二尺り浦の風流東西よ
輝しるハうれ合浦乃珠ハ孤ふるひ陽し
ものを影へぬへしやつれ一きび賺者してそれ
ものの求めるを知りたり一九び面除して地の
風雅乃おうひうきを嘆一きび閑論して

その自性と胸合するを春毎り鳴呼麦林
北風ハ東ちりおのハさるるすかるしあるとし
麦秋下と稲ハるものもしを名を借り桂式
飾るなるなる梨蜜初て明珠を拾ふる
暗り投ハれしかり円執合糊の徒りつるき
うつ嘲あるひハ疑或ハおそ表乃ことにそれを味
ふ面るるるるものハ表之向て長合獨なるも
おるるハるるるきけるる表ハりハるる吸寄落

の書をあつめむおもうあらうえれひろさ
きれ反古のうちにいさ社神風伊の第結
あり古社を又るう附会白化よれつるう
異なる称おりかに南路へ階響家ゑおみく
古今ゑ雅歌さ新ものるすす美む樫ゑ花き
うきのひにをれて梓ゑ福んと浪四いゑく
古れハきゑ一陣のちいうなりとふきう一巻
乃首尾ゑかつしすいゑうしうきあれ火

徒ゑえうやみうむうえおさめるふ帝りう
桐孫斧斤をもて一巻をかけうはきむへハ
玉山ゑ吟水を泊ゑ桂林う狸おさうぶ
おうくくハきれ玉むを毀ひ却の林おれん
各古うくゑいへ山うおそ自性の他落も
いふ屋れとりきすく懐うて小冊ゑふうぬ
きれハ斧斤入きす桐邪加へ以只考桂春
只是玉山

[illegible]め[illegible]る神田餞を

ともしめて

杖をかゝれとの[illegible]やとなをかろう〳〵　加周

菜ゑ〳〵[illegible]ん峯も薄　杖路

友もとゝ和風のゆき来れとふ一面　入楚

袖の名残はそらゝ家てあり　秋至

田の中行てあれとのそゝ　芦雲

夏〳〵角力れ口ういうつん　市邑

家ゝ通ふ弁一[illegible]ある月ゝ月ゝて　浮石

砧の音ゝ宮ひゝ[illegible]　巴朴

ゝ子ゝ[illegible]ゝ八郎ふ和ゝ金を入　昌雪

分限ゝ縁ゝ正直ゝ位　呂俊

接拶も京の土[illegible]ゝ[illegible]ん　其朝

[illegible]（合）[illegible]ゝ孫ゝき八おれ　和調

[illegible]彩化[illegible]畑と[illegible]の[illegible]恥ゝ　路

富士乃国者ゝ雲（案内　周

むく起き又剛毛生えたる

ヒヤめくるく初霜 桃雪

月あげてさ湯の味を汲んで居る 曾夫

蕎もさりしく麻生のあと 世水

冷やうに茶を踏んとりなるかな 井

上を忍れるたゝいまを 路

入れもを誠ハ茶を絹やうふ 京

元と雪会の山を耕す 同

路

ニヲ

蚤する家子乃ゝ雲子乃ゝのハに 井

天保ものうるて灯う踏てうる 京

米樫一あつのれ遣いれて見る 路

瘡を越れ宮乃短冊 同

生長きは乳母ハきくふ改てい 井

ヒトナ

菖蒲の塵も多ハ棟 路

ゆ紅ハ側ハ茅を鞭て通れす 琴

笑ふハもれ戸の一左右 同

汚カ

琴（来て七日のよう振る　路
香炉で青い炭を焚く　桃
角八木を製やられあげすれ　京
平家奮るもなって今刹　洞
月のように変を吸て戻る人　国
莖乃姫とうもかめる蕾変　我
蔵了とあと月にり八を　胡
ちきりくりけと日り　石

を使ふてひとつ買う俳諧て居　路
ろ〳〵牡丹て大名の札　国
京とう書好き国の古物　邑
むらおをまりて風　京
れれ戸とよ結てれ笠　国
未産つりめる舵丁の藝　路
敏杖も学とエ打こむ宏の月　京
住て破れ夏八う弾〳〵　路

けゝ乃ゐ古ゝなゝぬとゝつゝみ　我
奏すゝる日ゝ放条のゝ　俊
山めぐりせよとて花の咲そめし　路
紅るゝさゝほゝゝ朝起もあり　国
会ゝ場ゝ亡後ゝ　ゝ　言
くゝつくゝし彩ハ人乃き色ゝ　京
寅喰ゝハ還俗ゝ仏ゝ宗旨ゝて　路
畑のいきゝ物をきゝる風蘭　水

土用干ゝ感　状乃かび拭ゝ居る　我
人ゝ来ゝゝる瘦ゝる　の　堀　国
関所ゝゝ尾のすゝゝゝ目見ゝて　井
はゝゝきゝゝゝ古茶も一袋　俊
傘ゝゝゝゝ者ゝゝみゝゝゝ　国
麓ゝゝて抱ゝ仲人ゝゝゝ　路
乃ゝハゝゝ一のゝゝゝゝ　京
おゝゝゝゝゝゝ古ゝ居ゝ　我

菊よりきつてうえせてこれ月乃影　因
見て刹日ハ指ゝ月ゝむ　路
あゝひあ樋ゝ仕畜ハ秋さ前　柳
旅芝ゝく長て八上ゝ月ゝなり　路
みきゝゝもむ素をかゝて孔ゝき　因
一ト月ゝ月ゝ蛇ハゝ口ゝの　洛
ゝの中ゝに狐もおなじゝ丹おゝ　京
度ハおごゝし赤ゝゝ赤ゝゝ　路

翁ゝ来ゝ来ゝ拳ゝ手ゝを打ゝ　因
あゝゝきゝゝくゝゝなゝ化ゝ家の蝦夷　支
打ゝ蚤ゝ粥ゝを不めゝれゝもゝさゝめゝりゝん　胡
問ゝ答ゝ丸ゝ八ゝ栗　和忍厚　路
鳥ゝも起ゝ起ゝこゝなゝひゝをゝゝ化て　史
宿ゝか〳〵ゝれハ戸ゝ敲ゝ　柳
ゝの中ゝ屋乃月ゝ　路
香箱ハ丸ひゝゝく柳ゝ　因

聲

雪ふ雨ふ夏ハ夏ふ　京

夏ふ雨ふ夏ふ　邑

夏ふ雨ふ夏ふ　路

木曽路を人もるるや花　京

鶯のくちもふるて初しぐれ　京

とゝひとゝ来てもまゝ出てふゝ　同

いゝめ水面をのぞゝて居　越

ふゝを借す人を夏ふ　京

みゝゝふるゝ家ゝあげる手鞠を　邑

出ちのよりよりあるゝ葬礼　路

用のあゝ風ハよそゝ用ゝくゝぬ　夫

桃拭ふもせまい振舞　同

ぬすみゝゝ猫逃ゝ夏の月　越

教師ゝ家川ゝ尼乃七夕　同

鶯ハ川ゝも消ゝ出ゝ　吉

下駄のゝまゝ出ゝる点ゝ　京

好おり歯よ有はぬとあおもしろ　皮
大工ドうせ不建て能のく　井
雲の月ハ常此雪性たうれす　胡
笑このつるまてこもりてあてふ　史
きつる来て死りをひく茶の張　周
四もヤウにこに下前の色　蓮
吸雲養を防て

新しき春見つけてうり夏畠　李翔
蚕雲もて なれ家ヨ蝶く　源嵐
面の音雲うつれて来ル戸ヨ　桐原
夢仕事 あもるくうく　林水
俎板千秋は月も新理屑　千歳
鶯雪てあさかかう咲　秋年
ウ
五條まていつ雲扇ウる戸里　南雲
加賀枝を奢表巡神　女雲蝶

ちちはゝ孫八姫乃日うまりせ　芙蓉
去年うゑし文七土用丁　和鳴
簾れ〳〵ゝ〳〵ゝ山ゝ去ゝ〳〵ゝ　舊桂
社檀の書ゝ水北堂ゝ居　冠子
月西ゝ影扉風の松ゝ〳〵ゝの面　楚雲
医者ゝゝ〳〵八時笑ふなり　三楚
一龍ゝ去ゝ〳〵ゝ貧ふゝ舟りはく　漳河
焼火乃影ゝゝゝの自毒　白雪

延享五戊辰春

書林
江戸日本橋南二丁目　梅村宗五郎
京寺町二條上ル　井筒屋庄兵衛

叢桂堂蔵版誹書目録

南北新話 前篇上下 涼仏 ふるやかり 浮嚢菴 支考

伊勢のはま 武山 雙瓢 涼仏 独吟忘の百韻 涼仏

枯野問答 仝 百梅 海乃きれ 李趨

百題集 仝 百梅 ちりすゝ 仝

いせ支曽 東武 李趨 ほゝ仲 拾遺 雲汀

板路餞負 涼仏 連中 三丈楼

支考林社中 一句立 東武 桐原

敏 桃家のやとり 仝 林水 蓮里

江都日本橋通壹丁目 梅村宗五郎

昭和十三年六月写 原本水口氏所蔵